Bulletin of the School of Education,
Nagoya University (Psychology)
1997, Vol. 44, 155 − 163.

自己愛傾向に関する基礎的研究[1)]

——自尊感情，社会的望ましさとの関連——

小　塩　真　司[2)]

問題と目的

自己愛（ナルシシズム）に関する心理学的研究は従来，精神分析的観点からの理論的考察による研究が主なものであった。しかし，Raskin & Hall（1979）が自己愛人格目録（Narcissistic Personality Inventory；NPI）を開発して以降，人格障害の意味としてではなく，むしろパーソナリティ変数の1つとしての自己愛傾向の調査的研究が活発になってきている。日本においても，佐方（1986）や大石・福田・篠置（1987）がNPIの日本語版を作成したことから，これまでにNPIと様々な心理学的変数との関係が検討されてきている。そのような様々な研究の中で，NPI得点の高い者は支配的で攻撃的，外向的・活動的で自己顕示的であり，他者に敵意を持つ傾向があることなどが明らかになってきている（小塩，1997）。しかしながら，日本におけるNPIを用いた研究では，自己愛との関連が予想されるにも関わらず，十分に検討されないままに残されている心理学的概念がいくつか存在する。その中でも本研究では，自尊感情（自尊心；self-esteem）と社会的望ましさ（social desirability）に焦点を当て，調査を行うこととした。

1．自己愛傾向と自尊感情

多くの臨床家や理論家達によって様々な自己愛に関する記述がなされているが，自己愛の最も基本的な意味は自分が自分を愛すること（小此木，1981）である。一方，自尊感情は，自己の価値と能力の感覚－感情－（遠藤，1992）と一般に定義されるように，この両者は非常に類似した概念であるといえる。しかし，様々な自尊感情尺度が心理的な適応の指標として用いられることが多い一方で，NPIはもともとDSM－Ⅲ（APA，1980）における自己愛パーソナリティ障害の記述をもとに作成されており，両者が全く同じものを測定しているとは考えにくい。海外における先行研究では，NPIは様々な自尊感情尺度との間に正の相関関係が報告されてきている（Emmons, 1984；Raskin, Novacek, & Hogan, 1991；Rhodewalt & Morf, 1995；Watson & Biderman, 1993）。また，NPIの下位尺度すべてが自尊感情と正の相関関係にあるわけではなく，特に搾取性・権利意識（Exploitativeness／Entitlement）下位尺度は自尊感情とは無相関であることが報告されてきている（Emmons, 1984；Jackson, Ervin, & Hodge, 1992；Rhodewalt & Morf, 1995）。先行研究より，NPIは単一次元の尺度というよりも，いくつかの下位尺度から構成される多様な意味を含む尺度であることが明らかになっている（Emmons, 1984, 1987；Raskin & Terry, 1988など）。このようなことから，NPIによって測定される自己愛傾向には様々な側面が含まれており，その側面の中には自尊感情と関連するものとそうではないものがあると予想されるが，日本においてNPIと自尊感情との関連を検討した研究はほとんど見あたらない。そこで本研究では第1の目的として，NPIの下位尺度と自尊感情との関係を検討する。

2．自己愛傾向と社会的望ましさ

自己愛傾向の高い者は他者に賞賛されたいという欲求をもつ（APA，1994）。この点で，「自分自身をよく見せようとする」傾向として捉えられている社会的望ましさと関連すると考えられる。ところが先行研究では，NPIとCrowne & Marlowe（1960）の社会的望ましさ尺度（MCSD）に関しては，Auerbach（1984），Mullins & Kopelman（1988），Watson, Grisham, Trotter, & Biderman（1984）が無相関を報告している。また，他の社会的望ましさに関連する尺度との関係については，Raskin & Hall（1981）がNPIと

1）本論文は筆者が名古屋大学教育学研究科に提出した修士論文（1996年度）の一部を加筆・修正したものである。修士論文作成に際しご指導いただきました，名古屋大学教育学部教授　小嶋秀夫先生に感謝いたします。

2）名古屋大学大学院教育学研究科博士課程（後期課程）

Eysenck Personality Questionnaireの虚偽尺度との間に負の相関を，Watson et al.（1984）はNPIとEdwardsの社会的望ましさ尺度との間に無相関を報告している。このように，海外における先行研究では，自己愛傾向と社会的望ましさとの間には正の関連ではなく，無相関あるいは負の相関が報告されてきているのである。また，日本における先行研究では，大石（1988）がNPIとMMPIのL尺度，K尺度との間に無相関を報告しているほか，大石ら（1987）がMCSDとの間に正の相関関係を，佐方（1987）がNPIとMPIの虚偽尺度，NPIとMMPIのL尺度，K尺度との間に負の有意な相関を見いだしている。このように，NPIと様々な社会的望ましさ変数との関連が報告されているが，特に日本における先行研究では，自己愛傾向と社会的望ましさとの関連が一貫した結果を示しているとは言い難い。この先行研究の一貫性のなさの一つの理由として，十分な被験者数に基づいたデータが報告されていない点があげられる。例えば大石らの結果は男性30名のデータ，佐方の結果は男女58名分のデータに基づいた報告に過ぎない。そのため海外の研究と比較して，日本語版のNPIに関しては，社会的望ましさとの関係が曖昧なままに残されてしまっている。そこで，両者の関係についてより多くのデータを収集し，関連を検討することを本研究の第2の目的とする。また，MCSDと同時にMMPIのL尺度，K尺度を同時に実施することによって，より幅広く社会的望ましさを捉え，先行研究との比較を行っていくこととする。

方　法

1．被調査者・時期

以下の尺度で構成される質問紙を，愛知県内の大学・短大・専門学校生192名に実施した。内訳は，男性80名（大学生27，短大・専門学校生28，不明25），女性110名（大学生60，短大・専門学校生43，不明7），性別不明2名であった。なお，全被調査者の平均年齢は20.56（SD 2.22）歳であった。

調査時期は1996年7月であった。また，調査は講義時間等を利用し，集団実施により行われた。

2．尺　度

(1) **NPI**　自己愛傾向を測定する尺度として，大石ら（1987）によって日本語化されたNPI全54項目を用いた。回答は「とてもよくあてはまる（5点）」から「まったあてはまらない（1点）」までの5件法で測定された。もともとRaskin & Hall（1979）がDSM-Ⅲ（APA, 1980）の自己愛人格障害の記述から作成したNPIは，二者択一の強制選択方式で回答する方式がとられている。大石らによるNPIも同様の方式がとられているのであるが，宮下・上地（1985）は7件法で，佐方（1986）は5件法に回答方式を修正するなど，日本におけるNPIは様々に形を変えて用いられてきている。本研究では，あくまでも一般の人々の中に見られる自己愛傾向を問題とする立場から，二者択一方式ではなく，5件法で自己評定させる方式をとることにした。

(2) **自尊感情尺度**　Rosenberg（1965）の自尊感情スケール日本語版（10項目；安藤，1987）と，Cheek & Buss（1981；大淵ら訳，1991）によって作成された自尊感情尺度の日本語版（6項目）を組み合わせ，「当てはまる」「当てはまらない」の2件法で回答させた。両尺度間の相関は高く（$r=.64$, $p<.001$），組み合わせて用いることには問題がないと考えられる。

(3) **社会的望ましさ尺度**　本研究では社会的望ましさを測定するために，MMPI（日本MMPI研究会，1969）よりL尺度（15項目），K尺度（30項目）と，Crowne & Marlowe（1960）によるSocial Desirability Scale（以下MCSD；33項目；安藤，1987）の3尺度を用いた。L尺度とK尺度は，MMPIにおける妥当性尺度として使用されている。L尺度は，社会的には望ましいが個人にはめったに当てはまらない情況をあらわした項目群からなる。臨床的意味としては，高いL得点は防衛の指標にもなりうる（日本MMPI研究会，1969）が，被験者がどちらかといえば正常で世慣れた人なら，偽装の意図がL尺度で発見される場合はあまり多くない（ミール・ハサウェイ，1984）ともいわれている。一方，K尺度は本来，被験者のテストを受ける態度が，欺瞞的，防衛的であるかを判別し，MMPIの得点を修正する目的のもとでいくつかの段階を経て作成されたものである。L尺度とK尺度を比較すると，L尺度は極端な歪曲を見つけだすには比較的有効であるが，よりありふれた，また無自覚の様々な防衛（過大得点）を探知するにはやや役割不足であるといわれる。一方，K尺度はテストを受ける態度を妨害する影響を比較的上手く探知し，また正常と異常の識別を改善するためにも使うことができる（ミール・ハサウェイ，1984）といわれている。また，Crowne & Marlowe（1960）は，MCSDを作成する際，MMPIを母体とする社会的望ましさ尺度の項目は必然的に病理的な内容を持っており，それが社会的に望ましく答えようとする傾向によるのか，本当にそのような徴候がないことを正直に告白しているのかを決定することは不可能であり，特に大学生などのように正常な母集団から得られた高い得点が何を意味しているのかは解釈困難であると述べている。そして，彼らは行動の動機

づけ的な決定因を理解するために，社会的承認の欲求を測定する新しい尺度としてMCSDを作成した。このように，これら3つの尺度は互いに類似した項目も含んでいるが，成立過程やその目的は微妙に異なっている。従って，この3尺度を同時に実施することにより，より幅広く多様な社会的望ましさを捉えることができると考えた。なお，これら3尺度はすべて，「当てはまる（2点）」「どちらでもない（1点）」「当てはまらない（0点）」の3件法で尋ねた。

結　果

1．各尺度の分析

(1) NPI　全54項目に対して，因子分析（主因子法・プロマックス回転）を施し，解釈可能な因子として3因子を得た。そこで，各因子に十分な寄与を持たない21項目を分析から外し，残りの33項目に対して再度因子分析を行った。累積寄与率は42.66%であった。TABLE 1にプロマックス回転後の因子パターンを示す。第1因子は

TABLE 1　NPIの因子分析結果（プロマックス回転後の因子パターン）

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	共通性
【注目・賞賛欲求】				
48. 私は偉い人だといわれる人間になりたい	.70	−.02	.01	.48
20. 周りの人が私の期待しているだけの敬意を払ってくれないと，気持ちが落ちつかない	.68	−.02	−.10	.42
44. 私には，注目の的になってみたいという気持ちがある	.66	−.09	.17	.49
36. 私は人からほめられることを望んでいる	.64	.01	−.21	.38
34. 人が私に色々してくれるのを期待している	.60	.01	−.30	.34
12. どちらかといえば，私は注目される人間になりたい	.56	−.10	.38	.54
6. 私は強い人間だと思われたい	.50	.03	−.01	.26
17. 私は人々を従わせられるような権威を持ちたいと思う	.49	−.08	.36	.45
25. 世間から見て，かなりの生活ができなくては満足できない	.48	.19	−.12	.29
38. 私は支配欲が強い方だと思う	.46	.01	.24	.34
28. ここというときには，私は人目につくことを進んでやってみたい	.46	−.03	.39	.45
21. 私には自分の体を人に自慢したいという気持ちがある	.42	.17	−.08	.23
52. 大勢の前に出たとき，人が私に注意をはらってくれないとかえって落ちつかない気分になる	.39	.12	.06	.23
【優越感・有能感】				
14. 私は才能に恵まれた人間であると思う	.07	.74	−.05	.57
53. 自分は他人より有能な人間であると思う	.20	.71	−.02	.64
54. 私は周りの人達より，ずばぬけたものを持っていると思う	.15	.71	.02	.62
18. 私は周りの人が学ぶだけの値打ちのある長所をいくつか持っている	.02	.67	.11	.52
46. 周りの人々はたいてい私の権威を認めてくれる	−.12	.52	.20	.34
2. 私は，周りの人に影響を与えることができるような才能を持っている	.08	.51	.35	.55
27. 私は美しいものを決して見逃さない優れた感性の持ち主だ	.01	.49	−.04	.23
1. 感受性のするどさという点では，私は人に負けないものをもっている	.01	.45	.25	.35
9. 私に接する人はみんな，私という人間をしぜんに気に入ってくれるようだ	.00	.38	.01	.14
32. 人は誰でも私の話を喜んで聞きたがる	−.14	.36	.16	.17
49. 私が言えば，どんなことでもみんな信用してくれる	−.06	.36	−.04	.11
7. 周りの人達が自分のことをよい人間だといってくれるので，自分でもそうなんだと思う	.23	.35	−.12	.20
【自己主張性】				
16. 私は自分の意見をはっきりいうほうだ	−.09	.01	.79	.60
3. どうやら私は，控えめな人間というには程遠い人間だと思う	.12	−.26	.69	.46
10. 私はどんなことでも，あまり気兼ねなどしないで自分の好きなように振る舞っている	−.12	−.01	.61	.34
33. いつも私は話しているうちに，話の中心になってしまう	.06	.11	.55	.38
5. どんなことでも，敢えて挑戦するというようなやり方が，私の性格に合っている	−.10	.10	.53	.30
23. 私は自分で責任を持って決断するということが好きである	−.03	.20	.50	.35
45. これまで私は自分の思い通りのやり方でやってきたし，今後もそうしたいと思う	−.09	.24	.49	.34
19. 自分の思うとおりに人を使うのは，それほど難しいことだとは思わない	−.07	.15	.43	.23
因子間相関				
Ⅰ	—	.34	.30	
Ⅱ		—	.35	
Ⅲ			—	

13項目からなり，「私は偉い人だといわれる人間になりたい」「周りの人が私の期待しているだけの敬意を払ってくれないと，気持ちが落ちつかない」「私には，注目の的になってみたいという気持ちがある」など，主に自分が他者に注目されたり賞賛されることを期待する項目からなっている。そこで，第1因子を，「注目・賞賛欲求」下位尺度（平均38.08，SD 8.97）と命名した。また，第2因子は12項目からなり，「私は才能に恵まれた人間であると思う」「自分は他人より有能な人間であると思う」「私は周りの人達より，ずばぬけたものを持っていると思う」など，自分自身に対する強い自信や，他者に対する優越感といった内容の項目群からなる。そこで，第2因子を「優越感・有能感」下位尺度（平均32.79，SD 7.08）とした。第3因子は8項目からなり，「私は自分の意見をはっきりいうほうだ」「どうやら私は，控えめな人間というには程遠い人間だと思う」など，自分の意見をはっきりと言い，自ら決断する，また，やや自己中心的という言葉でよく表すことができるような内容の項目群からなっている。そこで，第3因子で得られた8項目を，「自己主張性」下位尺度（平均23.15，SD 5.72）とした。この下位尺度は，自己顕示的という意味では「注目・賞賛欲求」と類似している。しかし，「注目・賞賛欲求」が他者に注目されたい，賞賛されたいといった受動的かつ欲求的な内容から主に構成されているのに対し，「自己主張性」は自分から他者に向かって意見を言い，自分の思い通りに事を運ぼうとするといった，非常に能動的な項目群からなっている点が特徴的であると考えられる。

また，男女別で因子分析を行った結果，多少の項目の移動は見られたものの，各因子の指標となる項目の移動は見られず，ほぼ同様の因子構造が見られた。したがって，この3因子は男女共通の特性であるとみなしてもよいであろう。なお，ここで見いだされた各下位尺度の項目得点を合計し，それぞれ「注目・賞賛欲求」得点，「優越感・有能感」得点，「自己主張性」得点とするとともに，全33項目の得点を合計し，NPI総得点とする。下位尺度間の相関を見ると（TABLE 2），すべての間に有意な正の相関が見られたが，「注目・賞賛欲求」と

TABLE 2　NPI下位尺度間の相関関係と平均・標準偏差・α係数

	NPI	優越・有能	注目・賞賛	自己主張性	平均	S.D.	α
NPI	—	.80***	.82***	.69***	94.02	16.92	.90
優越・有能		—	.43***	.44***	32.79	7.08	.85
注目・賞賛			—	.32***	38.08	8.97	.86
自己主張性				—	23.15	5.72	.81

*** $p<.001$

TABLE 3　自尊感情の因子分析結果（バリマックス回転後の因子パターン）

	I	II	共通性
12. 自分の価値を信じている	.70	−.14	.50
13. 自分に大体満足している	.67	−.21	.50
11. 自分を好ましい人間だと思っている	.63	−.22	.45
3. 自分にはたくさんの長所があると思う	.62	−.02	.38
1. 私は少なくとも他の人と同じ程度には価値のある人間だと思う	.59	.10	.36
7. 何をしてもたいていの人と同じ程度にはうまくできる	.53	−.22	.33
6. 私の人生は，すべてうまくいっていない	−.46	.10	.22
10. 私の人生は失敗である	−.52	.21	.32
16. 自分は駄目な人間だと思うことが時々ある	−.09	.81	.67
15. 自分が役立たずな人間だと感じることが時々ある	−.19	.78	.65
4. 別の人間に生まれ変われたらよいのにと，よく思う	−.24	.59	.40
14. 自分をもっと尊敬できたらと思う	−.43	.49	.26
5. 自分を失敗者だと感じることが多い	.20	.47	.42
2. 私はだめな人間だと思う	−.38	.47	.36
9. 私には自慢できるようなものはほとんどない	−.39	.41	.32
自乗和	3.47	2.69	

「自己主張性」との間の相関係数は，他と比べてやや低い値を示した。また，内的整合性を表すα係数は.81～.90と，十分な値を示した。

(2) **自尊感情**　自尊感情16項目につき主因子法による因子分析を行った結果，寄与率28.54%の第1因子に，項目14以外の全項目が｜.40｜以上の負荷を持ち，1次元性の高いことが認められた。しかし，固有値の大きさなどから判断し，更に2因子によるバリマックス回転を行ったところ，主に肯定的な項目群からなる因子（第1因子）と，否定的な項目群からなる因子（第2因子）に分かれた（TABLE3）。

本研究ではRosenbergとBussの二つの自尊感情尺度をあわせて用いたが，Rosenbergの自尊感情尺度を用いた先行研究では，二つの因子が報告されているものもある（Carmines & Ziller, 1979; 井上, 1992など）。ここで得られた因子内容を検討すると，第1因子には主に「はい」と答えることによって自尊感情を測定する項目が，第2因子には全て「いいえ」と答えることによって自尊感情を測定する項目が高い負荷を示していた。そこで，Carmines & Zillerに従い，第1因子に高い負荷を示した8項目の得点を合計し，「積極的自尊感情得点（SA得点）」（平均5.62, SD2.16, α=.77），第2因子に高い負荷を示した7項目の得点を合計し「消極的自尊感情得点（SP得点）」（平均3.59, SD2.09, α=.74），さらに，両スコアの和を「自尊感情得点（ST得点）」（平均9.22, SD3.70, α=.82）とした。なお，両因子に十分な寄与の見られなかった項目8は分析から外された。また，SA得点とSP得点間の相関はr=.51（p<.001），ST得点とSA得点間，ST得点とSP得点間の相関係数はともにr=.87（p<.001）であった。

(3) **社会的望ましさ**　L，K，MCSDの各尺度について，逆転項目の処理を行った後，合計得点を算出した。L尺度に関しては，全15項目の得点を合計し，L得点（平均8.19, SD4.36, α=.66）とした。K尺度に関しては，全30項目中，内的一貫性を著しく低下させる3項目（項目4, 12, 13）を除き，残りの27項目の得点を合計し，K得点（平均21.68, SD7.64, α=.75）とした。MCSDに関しては，全33項目中，内的一貫性を著しく低下させる1項目（項目27）を除き，残りの32項目の得点を合計し，MCSD得点（平均30.71, SD9.35, α=.78）とした。TABLE4に，L，K，MCSD得点間の相関関係を示す。TABLE4に示したように，全ての社会的望ましさ得点間に有意な正の相関関係が見られた。Crowne（1979）は，MCSDとMMPIのL尺度の間に.54，MCSDとK尺度の間に.40の相関を報告しており，また，岩脇（1961）はL尺度とK尺度間に.48の相関を報告している。本研究で得られた相関係数は全体的にそれより高いものの，同様の結果を示している。

2．尺度間の関係

(1) **NPIと自尊感情**　TABLE5に，NPI得点と自尊感情得点との相関関係を示す。NPI総得点，「優越感・有能感」，「自己主張性」に関しては，ST，SA，SP各得点と有意な正の相関を示した。またNPI総得点は，SP得点よりもSA得点と強く関連する傾向があることが分かる。しかし，「注目・賞賛欲求」に関しては，他のNPI得点とは異なり，SA得点とのみ有意な正の相

TABLE 4　L,K,MCSD得点の相関関係

	L	K	MCSD
L	—	.61***	.65***
K		—	.57***
MCSD			—

*** p<.001

TABLE 5　NPI各得点と自尊感情各得点間の相関関係

	NPI	優越・有能	注目・賞賛	自己主張性
ST	.38***	.50***	.08	.38***
SA	.41***	.49***	.19**	.32***
SP	.25***	.38***	−.05	.35***

** p<.01　*** p<.001

TABLE 6　NPI・自尊感情とL・K・MCSD得点との相関関係

	L	K	MCSD
NPI	−.23**	−.20**	−.16*
優越・有能	.03	.03	.14
注目・賞賛	−.46***	−.41***	−.36***
自己主張性	.00	.02	−.06
ST	.17*	.32***	.14*
SA	.01	.15*	.06
SP	.28***	.40***	.20**

* p<.05　** p<.01　*** p<.001

TABLE 7　L・K・MCSD統制後のNPIと自尊感情との関係関係

	NPI	優越・有能	注目・賞賛	自己主張性
ST	.49***	.53***	.25***	.40***
SA	.43***	.48***	.24***	.30***
SP	.42***	.45***	.19*	.39***

数値は偏相関係数
* <.05　***<.001

関を示し，ST，SP得点とは無相関であった。

(2) **NPI・自尊感情とL・K・MCSD** TABLE6にNPI，自尊感情得点とL，K，MCSD得点との相関関係を示す。NPI総得点と「注目・賞賛欲求」は，3つの社会的望ましさ得点全てと有意な負の相関関係にあった。一方，自尊感情得点に関しては，ST得点，SP得点が3つの社会的望ましさ得点と有意な正の相関関係にあり，SA得点に関してはK得点とのみ有意な正の相関を示した。TABLE6に明らかなように，NPIで測定される自己愛傾向は，自尊感情傾向とは社会的望ましさという点で，逆の関係にあるといえる。つまり，自己愛傾向全体と自尊感情とは正の相関関係にあるにも関わらず，自己愛傾向の高さは社会的に望ましくなく見せることと関連し，逆に自尊感情の高さは社会的に望ましく見せようとすることと関連するのである。その傾向はNPIの下位尺度のうち「注目・賞賛欲求」と自尊感情尺度の下位尺度のうちSP得点において顕著であった。先程の分析（TABLE5）においては，「注目・賞賛欲求」とSP得点間は無相関であり，この結果には，社会的望ましさが影響を与えているのではないかと考えられる。

そこで，L，K，MCSDの3変数の影響を統制し，再度NPIと自尊感情との関連を見た（TABLE7）。TABLE7をTABLE5と比較すると，「優越感・有能感」「自己主張性」と各自尊感情得点との関係に大きな変化は見られないものの，特に「注目・賞賛欲求」と自尊感情との間に有意な正の偏相関係数が見出された。従って，社会的望ましさの影響を統制すると，「注目・賞賛欲求」とSP得点とが関連を持つことが明らかとなった。

考　察

1．自己愛傾向と自尊感情との関係

本研究の第1の目的は，NPIによって測定される自己愛傾向と自尊感情との関係を検討することであった。それぞれの尺度の因子分析結果より，NPIから「優越感・有能感」「注目・賞賛欲求」「自己主張性」の3つの下位尺度が，自尊感情尺度から「積極的自尊感情（SA）」と「消極的自尊感情（SP）」が見出された。そして，両者の相関関係より，全体としてNPIと自尊感情とは正の相関関係にあるものの，NPIはどちらかというとSP得点よりもSA得点と関係しており，また「注目・賞賛欲求」はSA得点とのみ正の相関関係にあり，SP得点，ST得点とは無相関であることが明らかとなった。

Rosenberg（1965）は，自尊感情には二つの異なる内包的意味があるとし，自分を「とてもよいvery good」と考える場合と，「これでよいgood enough」と考える場合とを区別する必要性があることを指摘している。そして，前者は優越性superiorityや完全性perfectionの感情と関連し，後者はたとえ平均的な人間であったとしても自分が設定した価値基準に照らして自分を受容することself-acceptanceであり，自分に好意を抱きself-liking，自分を尊重することself-respectであるとしている。本研究で自尊感情の測度として用いたRosenbergの尺度は，「これでよい」という側面を測定するように開発されたものであるが，遠藤（1992）は「とてもよい」という自尊感情は完全性や優越性を意味するから，これはポジティブ側面に対してYESと答える積極的肯定によって測定される。また，「これでよい」と自己に肯定性を与える与え方にはポジティブな側面を肯定する方向とネガティブな側面を否定する方向の二つがある，と述べている。また井上（1992）は，3種類の自尊感情尺度を分析する中で，Rosenbergの積極的自尊感情因子が自分自身を有能，有意義，成功的，価値ある者として考える程度を意味する因子と，自分自身を尊敬でき，価値ある人であり，これでよいと受容している程度を意味する因子の双方に関連し，消極的自尊感情の因子が後者の因子に関連することを見いだしている。

つまり，NPIによって測定される自己愛傾向は，全体として「とてもよい」という完全性や優越性に関連する積極的自尊感情とより強く関係する傾向があるといえる。このことは，自己愛概念の定義に沿う結果であるにも関わらず，海外の先行研究においても指摘されていない点である。今後さらに，NPIと他の自尊感情尺度との関連を探っていく必要もあるだろう。

2．自己愛傾向と社会的望ましさの関係

本研究の第2の目的は，自己愛傾向と社会的望ましさとの関連を検討することであった。結果，NPI総得点と「注目・賞賛欲求」について，L，K，MCSD全ての得点と負の有意な相関を示し，「優越感・有能感」「自己主張性」下位尺度とL，K，MCSDとは無相関であった。一方，自尊感情得点に関しては，ST得点，SP得点がL，K，MCSD全てと有意な正の相関関係にあり，SA得点はKとのみ正の相関を示した。先にも述べたとおり，日本における先行研究では自己愛傾向と社会的望ましさとの関連が一貫した結果を示していない。本研究は192名のデータをもとに分析されているので，日本における先行研究と比較して，この結果はある程度信頼できるものであると考えられる。では，「注目・賞賛欲求」と社会的望ましさとの負の関連性，自尊感情，特に消極的自尊感情と社会的望ましさとの正の関連性はどのように解釈すればいいのであろうか。

先行研究においては，例えばRaskin & Hall（1981）

は，NPIと虚偽尺度との間に負の相関を見いだし，社会的関係において搾取的な傾向を持つ自己愛傾向の強い者は，社会的にナイーブsocially naiveではないことが理由であると考察している。また，佐方（1986）は，NPIの下位尺度と虚偽尺度との間に負の相関を見いだしたことから，自己愛傾向を持つ人は，自分を良く見せようとしてウソをつきやすいと考えがちであるが，それはあくまでも自分にとって不都合さを強く感じたときであり，普段の態度としては自分を正直に表現するのではあるまいか，と述べている。

社会的望ましさの問題に関して撫尾（1973）は，ある反応が社会的に望ましい反応であっても，それがSD傾向の反映であるばかりとはいえず，ひょっとするとその被験者は本当にそのような社会的に望ましい人格の持ち主であるかも知れないと述べている。この「社会的に望ましい反応をしようとする傾向」と「被験者が持っている真のパーソナリティ上の社会的望ましさ」を分離して考えることは困難であり，それぞれの社会的望ましさ尺度がどちらを測定しているのかを特定することも困難である。しかし，この社会的望ましさに関する2つの考え方は，本研究の結果を解釈する上で非常に重要な示唆を与えるものである。

まず，社会的望ましさ得点の高さを「社会的に望ましい反応をしようとする傾向」であると捉えてみよう。このように考える場合，ある尺度得点と社会的望ましさ得点との相関が低ければ，その尺度は妥当性が高い（社会的望ましさの影響が低い）と解釈される。すると，社会的望ましさ変数と関連の見られた「注目・賞賛欲求」とSP得点は，社会的望ましさの要因に影響を受けることから，「尺度の妥当性に疑問がある」という解釈がなされる。このような場合の対処として第1に，社会的望ましさと関連のない項目を集める，あるいは尺度内で社会的望ましさの影響を相殺する方法が採られることがある。しかし，もともとNPIはDSM-Ⅲにおける自己愛パーソナリティ障害の記述をもとに作成された，ある程度病理的な内容を含む尺度であり，一方自尊感情尺度は心理的適応の指標として用いられることがあることを考慮に入れると，社会的望ましさの影響を除外した自己愛尺度や自尊感情尺度が，本当に自己愛や自尊感情を測定しうるのかという疑問が生じる。また第2の対処法として，社会的望ましさ傾向の介入を許し，検査後に何らかの修正を施す方法が採られることがある。例えば本研究で用いたL尺度やK尺度はもともとこのような目的で作成されたものである。本研究では，L，K，MCSDの3変数の影響を統制したときのNPIと自尊感情との偏相関係数を算出し，統制前には見いだせなかった「注目・賞賛欲求」とSP得点との正の関連性を見いだした。しかしここでも先ほどと同様に，社会的望ましさの影響を除いた自己愛得点や自尊感情得点が何を意味しているのかという問題が生じる。さらに，例えばK尺度に関しては，Comrey（1958）が因子分析によって8因子を抽出しているなど，非常に多義的な内容をもっている社会的望ましさ得点が純粋に社会的望ましさを測定しているのか，その得点によって社会的望ましさの影響を取り除くことが可能なのかどうかという問題が生じる。本研究の結果のみでは，これらの問題に関する明確な回答を述べることはできない。従って，この点に関しては問題を提起し，今後の課題として言及するにとどめておく。

次に，社会的望ましさ得点を個人差を表すパーソナリティ変数であると捉えてみる。例えば，MCSDは承認欲求の尺度としても用いられており，MCSD得点の高い者は承認欲求が高い者であるとも解釈される。このように考えると，自己愛，特に「注目・賞賛欲求」の高い者は他者からの承認を要求しない傾向が，逆に自尊感情，特に消極的自尊感情の高い者は他者からの承認を要求する傾向が見られることになる。DSM-Ⅳの記述にあるように，自己愛における賞賛の欲求は，他者に受け入れられることが当然であるという感覚に基づいたものである。従って，敢えて自分を好ましく見せ，他者に受け入れられようとする必要はなく，承認欲求とは負の相関関係になるのではないかと考えられる。一方，他者に受け入れられたいと思うことは，自分自身のポジティブな側面を積極的に肯定していく方向よりは，ネガティブな側面を否定し，良く見せようとすることにつながると考えられる。そのようなことから，MCSDとSP得点が正の相関関係を示したのではないかと考えられる。

このように，社会的望ましさに関して2つの観点から考察してきたのであるが，社会的望ましさをいかに定義するか，また社会的望ましさをいかに測定するかに関しては不明な点が多く，包括的な研究が待たれるところである。しかしながら，本研究で見いだされた結果は，先行研究における日本語版NPIと社会的望ましさとの間の不安定な関連性を補足するという点で意味あるものと考えられる。

引　用　文　献

American Psychiatric Association 1980 *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders Third Edition: DSM-Ⅲ*. Washington, DC: Author.

American Psychiatric Association 1994 *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders Fourth Edition : DSM-* Ⅳ. Washington, DC: Author.

安藤清志 1987 さまざまな測定尺度 末永俊郎（編）社会心理学研究入門 東京大学出版会 Pp.211-228.

Auerbach, J.S 1984 Validation of two scales for narcissistic personality disorder. *Journal of Personality Assessment,* **48**, 649-653.

Carmines, E.G., & Ziller, R.A. 1979 *Reliability and validity assessment.* Beverly Hills: Sage.（水野欽司・野嶋栄一郎（訳） 1983 テストの信頼性と妥当性 朝倉書店）

Cheek, J.M., & Buss, A.H. 1981 Shyness and sociability. *Journal of Personality and Social Psychology,* **41**, 330-339.（バス, A.H. 大淵憲一監訳 1991 対人行動とパーソナリティ 北大路書房より）

Comrey, A.L. 1958 A factor analysis of items on the K scale of the MMPI. *Educational and Psychological Measurement,* **18**, 633-639.

Crowne, D. 1979 *The Experimental Study of Personality.* New Jersey : Lawrence Erlbaum Associations, Inc.

Crowne, D., & Marlowe, D. 1960 A new scale of social desirability independent of psychopathology. *Journal of Consulting Psychology,* **24**, 349-354.

Emmons, R.A. 1984 Factor analysis and construct validity of the narcissistic personality inventory. *Journal of Personality Assessment,* **48**, 291-300.

Emmons, R.A. 1987 Narcissism : theory and measurement. *Journal of Personality and Social Psychology,* **52**, 11-17.

遠藤由美 1992 個性化された評価基準からの自尊感情再考 遠藤辰雄ら編 セルフ・エスティームの心理学 自己価値の探求 ナカニシヤ出版, Pp.57-70.

Jackson, L.A., Ervin, K.S., & Hodge, C.N. 1992 Narcissism and body image. *Journal of Research in Personality,* **26**, 357-370.

井上祥治 1992 セルフ・エスティームの測定法とその応用 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千壽（編） セルフ・エスティームの心理学 自己価値の探求 ナカニシヤ出版 Pp.26-36.

岩脇三良 1961 MMPIに対する回答の妥当性について 教育心理学研究, **9**, 101-105.

ミール, P.E.・ハサウェイ, S.R. 1984 MMPIにおける抑制変数としてのK因子 ダールストローム, W. G.・ダールストローム, L.E. 阿部満州・小野直広（監訳） MMPI原論 新曜社 Pp.93-138.

宮下一博・上地雄一郎 1985 青年におけるナルシシズム（自己愛）的傾向に関する実証的研究(1) 総合保健科学, **1**, 51-61.

Mullins, L.S. & Kopelman, R.E. 1988 Toward an assessment of the construct validity of four measures of narcissism. *Journal of Personality Assessment,* **52**, 610-625.

日本MMPI研究会 1969 日本版MMPIハンドブック 三京房

小此木啓吾 1981 自己愛人間 朝日出版社

大石史博 1988 自己愛的人格に関する研究(3) －CMI, MMPIとの関係について－ 日本心理学会第53回大会発表論文集, 109.

大石史博・福田美由紀・篠置昭男 1987 自己愛的人格の基礎的研究(1) ―自己愛的人格目録の信頼性と妥当性について－ 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 534-535.

小塩真司 1997 Narcissistic Personality Inventory を用いた自己愛的性格傾向の研究 －現状と課題－ 教育心理学論集（名古屋大学大学院教育心理学専攻編集 ; 1996年度）, **26**, 37-45.

Raskin, R. & Hall, C.S. 1979 A narcissistic personality inventory. *Psychological Reports,* **45**, 590.

Raskin, R. & Hall, C.S. 1981 The narcissistic personality inventory : alternate form reliability and further evidence of construct validity. *Journal of Personality Assessment,* **45**, 159-162.

Raskin, R., Novacek, J., & Hogan, R. 1991 Narcissism, self-esteem, and defensive self-enhancement. *Journal of Personality,* **59**, 19-38.

Raskin, R. & Terry, H. 1988 A principal-components analysis of the narcissistic personality inventory and further evidence of its construct validity. *Journal of Personality and Social Psychology,* **54**, 890-902.

Rhodewalt, F. & Morf, C.C. 1995 Self and interpersonal correlates of the narcissistic

personality : A review and new findings. *Journal of Research in Personality*, **29**, 1-23.

Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton : Princeton University Press.

佐方哲彦　1986　自己愛人格の心理測定　－自己愛人格目録（NPI）の開発－　和歌山県立医科大学進学過程紀要, **16**, 63-76.

佐方哲彦　1987　自己愛人格目録（NPI）の妥当性に関する研究　－Y-G検査およびMPI, MMPIとの相関から－　日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 538-539.

撫尾知信　1973　Social DesirabilityとSocial Desirability尺度　心理学評論, **16**, 209-227.

Watson, P.J. & Biderman, M.D. 1993 Narcissistic personality inventory factors, splitting, and self-consciousness. *Journal of Personality Assessment*, **61**, 41-57.

Watson, P.J., Grisham, S.O., Trotter, M.V., & Biderman, M.D. 1984 Narcissism and empathy : validity evidence for the narcissistic personality inventory. *Journal of Personality Assessment*, **48**, 301-305.

（1997年9月16日　受稿）

ABSTRACT

A Study on Narcissism : Relationships among Narcissistic Personality, Self-Esteem, and Social Desirability

Atsushi OSHIO

The purpose of this study was to examine relations among narcissism, self-esteem, and social desirability. The Narcissistic Personality Inventory (NPI) revised by Ohishi et al. (1987), the Self-Esteem Scale (SE-S), the MMPI-L Scale, the MMPI-K Scale, and Marlowe-Crowne Social Desirability Scale (MCSD) were administered to 192 subjects (mean age 20.6 years). A factor analysis of the NPI revealed three significant factors which were labeled "sense of superiority and competence," " need for attention and praise," and "self-assertion." As a result of a factor analysis on the SE-S, two significant factors were revealed : "active self-esteem (A-S)" and "passive self-esteem (P-S)."

The NPI showed significant, positive correlations with SE-S, A-S, and P-S, and significant negative correlations with MMPI-L, MMPI-K, and MCSD. The "sense of superiority and competence" factor showed significant positive correlations with SE-S, A-S, and P-S. The "need for attention and praise" factor showed a significant, positive correlation with S-A, and significant negative correlations with MMPI-L, MMPI-K, and MCSD. The "self-assertion" factor showed significant positive correlations with SE-S, A-S, and P-S. Implications of these findings were discussed.

Key words : narcissistic personality, self-esteem, social desirability